令和５年度　霞ヶ浦学講座第２講「小川の霞ヶ浦水運」実施報告

実施日時：令和５年 12 月 17 日（日）13:30－15:00

場所：霞ケ浦環境科学センター多目的ホール

講師：本田信之　氏（小美玉市玉里史料館）　　参加者数：25 名

テーマ：「小川の霞ヶ浦水運」

講演概要

小川は、元和８年（1622）に水戸藩に編入されました。その頃は、人は街道を行き、物は船で運ばれる時代でした。江戸上下屋敷で消費される米などの生活物資が江戸近郊だけでは賄いきれなくなることもあり、藩内から江戸に大量に輸送する方法が必要となり、東遷によって銚子方面までつけ替えられた利根川（内水面）を利用した内陸航路（内川廻し）が確立されました。東北から江戸への航路は鹿島灘を回るコースもありましたが、難所のため、この航路が発達しました。

水戸と江戸は水戸街道を通じて 29 里 31 丁（117km）あります。

水戸からは那珂湊の手前から涸沼川、涸沼を通り、海老沢、網掛で荷揚げしたあと

１．小川河岸まで陸路（その後、園部川を経由して霞ヶ浦）　または

２．下吉影河岸（巴川）まで陸路、その後、巴川を下り北浦

のルートをたどりました。その後、利根川を遡上し、関宿（関所）から江戸川に入り南下していました。時間短縮を図るために、いくつもの運河を掘る計画がつくられましたが、ほとんどがうまくいきませんでした。大貫運河も水路は掘られましたが、機能は果たせませんでした。

小川河岸は水戸藩御用河岸で、元和 10 年（1624）に開設されました。（下吉影河岸は慶安４年（1651）に開設）。当初は小川に運送方役所がおかれ運送奉行の下、領内年貢米の取り扱い、藩邸用物資の輸送、藩用船の借り上げ、運賃の査定などが行われていました。（その後、移転しています。）藩船は 15、民間の商船が 52 艘ありました。水戸藩御用船は「丸ニ水」の船印を掲げていました。

高瀬船は、「高瀬（水面下の地表が高い）で使用する川舟」で大きさは小型の場合約９m、大型になると約 26m にもなります。船底が平らなため、浅瀬でも航行が可能です。セイジという船室がついており、停泊時は、水主（かこ）がそこで過ごして積み荷を見張っています。積載量は利根川図誌によると「米五六百俵積む者常なり。」とあり、最大では 900 俵積めるものもありました。

江戸への航海についても古文書「誉田家文書」の「川篠風雨泊り日記」、「誉田弥五左衛門日記」から多くのことが読み取れます。日記によると串挽から江戸まで 9 日間、江戸から串挽まで 14 日間かかっています。運航は、（利根川を）遡上する場合で風があるときは「帆走」し、風がない時は「風待ち」となります。また渇水時は、左右両弦に分かれて竹竿を水中に差し船を動かす「竿働き」や「水待ち」となります。また綱で進むこともありました。小川からは、炭、薪、大豆、米が運ばれ、帰りには酒空樽、塩、江戸で買いつけた小間物が運ばれていたようです。

（文責　小川）